

## 〔資料紹介〕 斎藤たまの調査カード

狩 野 萌

### 1. はじめに

無形文化遺産部では2017年に民俗学者斎藤たまの調査カード約47,000枚と調査ノート127冊の寄託を受け、この整理を行っている。本稿ではこの資料の整理事業について紹介する。

斎藤たまは在野の民俗研究者で自ら日本各地を歩いて民俗採集にあたった人物である。採集の成果をまとめた著作も多数出版しているが、アカデミズムに属していなかったため、その業績はあまり知られておらず、評価もほとんどされてこなかった。しかし斎藤たまによって採集された民俗は現在では消滅の危機にあり、それを書き残した調査カードは民俗学的に貴重な資料である。

斎藤たまは1936年に山形県東村山郡山辺町に生まれ、山形県立東高等学校定時制を卒業後、渋谷の書店に勤務した。この頃子供の遊びに興味を持ち<sup>1)</sup> 1971年に勤めをやめ民俗採集を始めた。日本全国を歩き、主に年配者から聞き取りを行う採集は多大な時間と労力をかけたものであった。また埼玉県秩父市浦山の嶽部落に居を定め、自給自足の生活を送りつつ、旅で採集したことをもとに執筆活動に励んだ。後に秩父市の町中に移り、晩年は入院生活が長く続いたが2017年1月26日に逝去した。

著作は子供の遊びをまとめた処女作『野にあそぶ』（平凡社、1974年）や人と関わりの深い植物について記した『暮らしのなかの植物』（論創社、2013年）、身近な言葉の語源を探った『鶏が鳴く東』（新宿書房、2012年）、『ペロペロカペロ』（新宿書房、2012年）、便所に関する民俗を集めた『便所の民俗誌』（論創社、2011年）、『落とし紙以前』（論創社、2005年）、魔除けについて記した『まよけの民俗誌』（論創社、2010年）、『行事ともののけ』（新宿書房、1988年）など多岐にわたっている。採集初期には子供の遊びに重点を置いていたが、見聞きするうちに関心領域が広がっていき採集対象が増えていったと推察される。様々なテーマを取り上げた著作は、膨大な民俗事例に加えて山形での子供時代や秩父での生活が実体験として踏まえられており、他の民俗研究にひけをとらず異彩を放っているといえよう。

### 2. 資料入手の経緯

調査カードは、斎藤たまの著作を多数出版している論創社（東京都千代田区）が2014年より預かっていたもので、本稿で紹介する調査カードの他、調査ノート、手帳、手書きの原稿、所蔵資料（書籍類）などが木箱や段ボール箱で保管されていた。この貴重な資料の保存と活用について論創社では検討を重ねておられたが、2016年に斎藤たまの著作の愛読者でもある民俗学者・岩城こよみ氏に所蔵先について相談され、岩城氏の仲介によって無形文化遺産部との話し合いがもたれ、寄託される運びと

なった。

上記資料のうち、今回寄託を受けたのは調査カードとその元となった調査ノートのみであり、その他の資料については岩城氏が引き取っている。調査ノートについては、その内容が基本的にカードに書き起こされているため、デジタル化や整理は行わない方針であるが、カードには採集年代と日付が明記されていないものが多く、ノートと対照させることによって大抵のカードについては年代と日付がわかる可能性があることを付記しておく。

これらの資料は無形文化遺産部で一時的に預かりデジタル化と整理を行い、ゆくゆくは検索可能な形で公開を検討している。ただし、原資料に関しては、最終的には然るべき収蔵施設（斎藤たまと関わりのある博物館や資料館等）に収められることが好ましいと考えており、整理作業を行いつつ、収蔵先も検討している状況である。

なお資料寄託当時、ご本人は長期入院中で直接お話することは難しい状況にあり、ご家族の意志によって寄託が実現したのだが、資料を引き取った2017年1月26日の夕刻に、奇しくも同氏は息を引き取られた。

### 3. 資料の特徴

調査カードの大きさは縦約7.5cm×横約12.5cmでカード上部中央にタイトル（主に民俗語彙）、左上にサブタイトル（一般的な名称や食・葬式などの分類）が書かれている。その下には聞き取った事柄とそれを語った人物の名前と生年、採集した場所、また採集年代が書かれているものもある。なかにはスケッチが描かれているものもあり、著作に数多く転載されている。

調査カードは木製の小型たんすに収納され、基本的に五十音順に並べられており、見出しを明記したカードで仕切られている。そして引き出しごとに植物、動物、遊び、言葉、魔除けなどのテーマによって分類されている。

カードの内容は採集された民俗語彙（植物や動物、身体、道具の地方名称）や植物の利用方法（調理方法や遊び方、行事やまじないにおける使い方）、子供の遊び、昔話などである。また文献から引用した事項が転記されたカードもある。

採集された事柄は他の調査報告や研究では採集されていないものが多く、現在では失われた民俗であることがほとんどである。斎藤たまはこの調査カードをもとに書籍を執筆しているものの、著作のなかで取り上げられたカードは一部であり、公開されていない民俗事例が数多く眠ったままとなっている。調査カード自体かつての生活の記録として貴重な第一次資料であるが、斎藤たまの著作の背景にある膨大な事例とその研究の広大さを知る上でも重要な資料である。

### 4. 資料の整理方法

調査カードの項目を検索できる状態で公開することを目指し、下記の方法で整理を進めている。

- 1 調査カードに固有番号を記入したあとデジタル化し、PDF形式で保存する。

- 2 調査カードに記載されたタイトル、サブタイトル、話者名、話者の生年、採集地、採集年代を抽出しデータベース化する。
- 3 検索のための分類とキーワードを付与する。

分類については斎藤たま自身も付与しているが、一つしか付与されていないため複数の分類にまたがっているカードが検索しにくくなっている。検索性向上のため、第3分類まで付与することとした。なお分類の方法については文化庁文化財保護部監修『日本民俗資料事典』（第一法規出版、1969年）を一部参考にした。これによって地域別、キーワード別、分類別で検索することが可能となる。

## 5. 考察

斎藤たまの民俗採集は、離れた地域でも同じ遊びが普遍的に広がっていることに興味を抱いたところから始まり、植物や動物を使った遊び、言葉遊び、辻遊びなどを数多く採集している。特にあやとりに関しては多大な関心を寄せており『あやとり いととり』（福音書館、1982年）にまとめられ英訳も発表されている<sup>2)</sup>。子供の遊びを詳細に採集した人物はおそらく斎藤たまが唯一であり、この採集によって創意工夫に満ちた子供の豊かな世界を垣間見ることができる。例えばオオバコの遊び方として草相撲、機織り、まり、目はじき、草笛、葉風船などが採集されており、オオバコ一つから多様な遊びが生み出されたことがわかる（目はじきについては図1を参照されたい）。このような植物を用いた遊びの多くは現在では忘れられつつあるといっていよう。

また斎藤たまは言葉に対しても注目しており、植物の名称などの語源を考察している。その特徴は事典に書かれた語源を鵜呑みにせず、全国で採集した民俗語彙を考慮に入れている点にある。例えばウバユリ（ユリ科）の語源について考察する際には『牧野新日本植物圖鑑』（北隆館、1961年）の「花の咲く時はたいてい葉は枯れているので花の時、齒（葉）がもうないことを、女兒の世話をする女が娘が成人して花の十八となった頃にはもう齒の抜けたうばになるのにたとえてこの名ができた」<sup>3)</sup>という説明を批判している。斎藤たまはウバユリが他のユリ類と比べて葉が大きいことに注目し、姥ではなく大葉が名前の由来であろうと推察している。オオバユリからウバユリに変化したのであり、東北地方でのウバユリの呼び名アエバエロ（秋田県雄勝郡東成瀬村入道森、図2を参照されたい）やエアバエロ（秋田県平鹿郡山内村三又・現秋田県横手市山内三又）などもオオバユリが訛ったものだと論じている<sup>4)</sup>。こういった語源論を組み立てる上で、調査カードによる整理方法は各地の語彙を整理するのに有益だったと推察される。

他にも斎藤たまは用を足した後、尻を拭く際に何を使用したのかについて調査をしている。斎藤たまによると紙が普及する以前は蓆などの葉や、藁や麻がら（繊維を取った後残る柄の部分）、竹やイタドリ（タデ科）などで作った棒が使用されていたという<sup>5)</sup>。これらは繁殖力旺盛で沢山とっても差し支えないものが大半で、棒の場合は割りやすい種類の植物が用いられた。ここに植物の特性を活かして生活に取り入れ、無駄を生み出さないよう工夫した人々の知恵が現れているといえよう。

尻拭きについて詳細に調査したものは斎藤たま以前にはない。それはあまりに身近なこと故記録されにくく、なおかつ生理的な事柄で学問的対象になりにくかったためであろう。しかしそういった身

近なことに目を向け人々の生活の変遷を明かにするのが民俗学の目指すところであり、身近なことにこそ人間の生活の本質が現れると考えられる。そのため尻拭きという、卑近なこととして見棄てられがちなものに目を向け、詳細に書き留めた一連の調査は注目に値するといえよう。

ここまで述べてきたように斎藤たまは様々な民俗を採集しているが、子供の遊びに関しても尻拭きに関しても、野草を利用した事例が目立つ。栽培植物の聞き取りも行っており、藁についてまとめた著書『わらの民俗誌』（論創社、2011年）もあるが、比較的野草の多様な活用方法の調査に力を入れている傾向がある。例えばオオバコに関して、前述した遊び方の他に薬として使用したりご飯に混ぜて食べたりした事例なども採集している。このような野草の知識は現在では失われつつあり、農耕と比べると一段階低い生業と見なされるためか採集に関する研究も少ない。しかし実際には採集は人々の生活に組み込まれ欠かせないものであり、農耕に劣らない大切な糧であった。そこから現代にも活きるであろう様々な知恵が生まれている。そういった知恵を書き留めた斎藤たまの調査カードは、先人たちが培ってきた英知の記録としてかけがえのないものである。

## 6. 結び

斎藤たまの調査は自然との関わりが深かった時代の生活の様子を丹念に採集している。それを書き留めた調査カードは失われた習俗の記録として大変貴重であり、自然に存在するものを最大限活用した先人たちの知恵を今に伝えている。なおかつ斎藤たまの膨大な研究を考える上でも重要な資料である。この調査カードの整理と公開によって、注目されることの少なかった斎藤たまの業績に光が当てられ評価されることが期待される。そしてやがては斎藤たまの調査が活かされ次世代につながれば幸いである。

貴重な資料を提供して下さったご遺族、論創社、仲介にあたってください岩城こよみ氏に厚く御礼申し上げます。

### 《注》

- 1) 斎藤たま『野に遊ぶ 自然の中の子供』（平凡社ライブラリー）平凡社、2000年、348頁
- 2) SAITO Tama, 2004, "String Figures of Japan," Bulletin of the International String Figure Association,11
- 3) 牧野富太郎『牧野新日本植物圖鑑』北隆館、1961年、846頁
- 4) 斎藤たま『ペロペロカペロ ことばの旅②』新宿書房、2012年、201～205頁
- 5) 斎藤たま『落し紙以前』論創社、2005年

### 参考文献

今野哲男「“歩く人”の秘密」『月刊ことぶき』2002年8月号、78～82頁

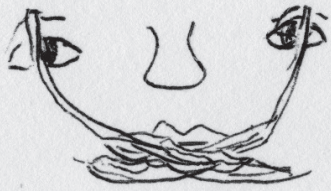
斎藤たま『暮らしのなかの植物』論創社、2013年



(おおばこ)

メンコのツラコ

00741



サニシ(オオバコ)のトリニ  
の穂の方を口でつまみ、軸の  
目をヒッパジキ、~~き~~に

「メンコのツラコ こしらえて遊ばな」といふ

「お面のツラコのようになるが」といふ

名なし

秋、熊野や世米木

秋市、上新域中

48

図1

00442

アエバエロ

アエバエロ



オス — トウが太く花が咲く、六月

~~メ~~

半ば、白い小花を多くつける。

根が小さいので、食べない。  
三日後になる。

メス — 花は咲かない、カマキリ

頃、根を焼いて食べる。  
百合の味。

秋、東成瀬村入道

48

図2

## Investigation Cards by SAITO Tama

KARINO Moe

SAITO Tama (1936-2017) is an independent folklore researcher who walked throughout Japan collecting folklores. Her collection covers a wide area including children's play, words, uses of plants, and events. She has also written many books, but her unique research has not been evaluated much until now.

The Department of Intangible Cultural Heritage was donated with approximately 47,000 investigation cards of SAITO Tama in January 2017 and is in the midst of arranging them. By categorizing the cards according to keywords it is hoped that they may be searchable and utilized widely.

SAITO Tama's collection related to folklore of children's play is numerous beyond comparison. In particular those about string figures compiled in *Ayatori Itotori* (Fukuinkan Shoten, 1982) and translated into English ("String Figures of Japan," *Bulletin of the International String Figure Association*, 11, 2004) is worth noting. Other than these, she has also collected information which is too close to people's daily life, such as what do they use when they defecate or urinate, that they could not be considered subjects for academic study, although quite interesting from the point of view of folklore study.

SAITO Tama also spent much effort collecting vocabulary, and it appears that using investigation cards was quite useful in arranging words that differed from one area to another. Using the enormous number of cards, she developed her own theory of etymology, avoiding simply accepting what a dictionary says.

These investigations reflect in close detail the life style of the time when people's relation with nature was very close. The investigation cards are extremely valuable as record of lost customs, and transmit to the present the wisdom of our predecessors who utilized things that exist in nature. It is hoped that the arranging of these investigation cards will shed light on SAITO Tama and evaluate her work.